

図書紹介

John F. Cady: *Southeast Asia—Its Historical Development*. McGraw-Hill, New York, 1964. xvii+657pp.

著者は約30年の研究歴を有するアメリカにおける東南アジア専門の歴史学者で、現在 Ohio 大学の歴史学教授。The Roots of French Imperialism in Eastern Asia, (1954) や、A History of Modern Burma, (1958) などの近代史関係の著述もあるが、本書は数少ない東南アジア史の概説書として頗る注意に値するものである。

内容は本文が6部、26章よりなり、末尾に主要事件の地域別年表と、重要文献目録を附している。第一部“Setting”は序論と称すべきもので、その第一章においては、東南アジアの地形的特徴を概観し、それが民族移動の方向や、交通・貿易、文化・政治の発展に及ぼす影響を述べるとともに、季節風や雨の降り方と農業との関係、耕法を異にする平野・山地民族の併存とその歴史的意義、さらに東南アジア史上においてかつて指導的役割を演じ、また現に演じつつある主要民族の文化的な特質、共通性、相互関係を説き、次章においてはシナ・インドとの経済的文化的交渉の問題をとりあげ、双方文化のこの地域に及ぼした歴史的影響の強弱とその理由を検討し、とくに初期において著しい影響を及ぼしたインド文化の性格、この地域のインド化の過程、その受容の仕方を考察している。第二部以下は本論というべきもので、第二部“Early Empires”では、4章にわたり扶南・シュリヴィジャヤとジャワ・カンボディア・パガン（ビルマ）などを中心に、概ね1世紀から13世紀ごろまでに興亡した主要諸国の政治・社会・文化について述べ、第三部“Transition to Modern Times,”の3節では、東南アジア史上でも大きな影響を及ぼしたモンゴル族の侵入からポルトガルの進出までの激動期を扱い、その間においてインドシナ半島に覇を唱えたタイ族の国々や、ジャワにおけるマジャパイト王国、さらにイスラム教国マラッカにおける東西貿易の発展とジャワなどにおけるイスラム化進行過程について述べている。次いで第四部、

“European Commercial Dominance”の6章では、17世紀から19世紀の中葉までのオランダ、スペイン、イギリスなどの商業活動を中心に、ビルマ、タイ、ヴェトナムの政治、文化についても述べられ、また第五部、“Intensive Economic Development”の5章では、19世紀から20世紀にかけてのジャワ、ビルマ・マラヤ、ヴェトナムに対する統治国オランダ、イギリス、フランスなどの植民地政策とそれによる経済的発展について、さらに最後の第六部、“Political Reform and Nationalist Revival”の7章では民族運動の発展を中心に、20世紀の東南アジア諸国の政治について述べ、第二次世界大戦中における日本の占領、戦後における独立諸国の動向、将来の展望に及んでいる。

本書は概説書であるが、史実の羅列的叙述でなく、常に因果関係を考え、とくに東南アジアの地域性を重視し、この地域とシナ・インド・西南アジア・ヨーロッパなど先進地域との経済的文化的関係に注意している。また先年刊行されたイギリスの D.G. E. Hall 教授の“A History of South-East Asia” (1955) 以後における最新の研究成果をも多くとり入れ、概説書としてよく纏っている上に、各所に関係の地図を挿入して読者の理解を助けている。東南アジア史の入門書として好適の著作と言えるであろう。（藤原利一郎）

Bennington-Cormell : *Anthropological Survey of Hill Tribes in Thailand; A Report on Tribal Peoples in Chiengrai Province North of the Mae Kok River, The Siam Society Under Royal Patronage, Bangkok, 1964.*

1963年から64年にかけて、約8か月間、Bennington College と Cornell 大学が合同で北部タイにおける山地部族（hill tribes）の人種・生態学的な調査研究（実質的な現地調査は5か月）を行ない、Bennington College の Lucien M. Hanks および Cornell

大学の Lauriston Sharp を初めとする12人の学者がこれに参加した。本書（タイプ印刷）はその予備報告書である。まえがきで「予備」(preliminary)という言葉が強調されていることから分るように、内容はきわめて簡素で、概説的である。わずか79ページの本文に、前半で、調査地の地理、人口、行政、治安、経済、移住問題、保健、教育、種族関係などの多方面にわたる調査資料をすべて要約し、後半でそれぞれについて勧告ないし対策を述べているのであるから、けだしそれは当然である。それにしても、きわめて平易な英語で手際よくまとめられており、調査報告書を出すには一つの参考になるであろう。

調査地域は、南と東が Mae Kok River に接し、北と西がラオスとビルマの国境に囲まれた Chiengrai Province の一地方、つまり Mae Kok Region である。そこには、Thai, Shan, Yunan Chinese, Karen, Lissu, Yao, Lahn および Akha の8種族が住んでおり、本書では後の5つが部族 (tribes) として扱われている。部族たちはほとんどが高地 (uplands) に住んで dry agriculture (水稻と陸稲の両方を栽培する Karen 族を除けば、すべての部族が陸稲と家畜用のとうもろこし、その他を栽培している) を営み、灌漑稲作の行なわれる平地 (lowlands) の住民 (主にタイ人) の生活からは遊離している。しかし、生活様式の面においても、また生産技術 (稲作) の面においても、lowlands の影響は大きく、言葉も北部タイ語が次第に uplands の共通語になりつつあり、uplands と lowlands の融合にはもはや2世代は要しないであろうと言われる。とは言え、部族はラオスやビルマの国境を越えて往来するものが多く、この地方はタイ政府の決定のみならず、間接的にはラオスやビルマ、さらには中国政府の決定の影響を受けて、政治的には international な、複雑な様相を呈している。

いわゆる「地域研究」としてさまざまな側面から検討された山地部族の生活、および彼らの平地住民に対する相互関係は、簡略ながらも一応興味深く読むことができるが、後半に示される勧告ないし対策には思いつき程度のものが多く、深く掘り下げた重みのある調査報告を期待する向きには失望を買うであろう。ただし、予備報告にそこまで要求する方が無理かもしれない。なお、付録には、北部タイ住民の服飾や手工芸を扱った Ruth B. Sharp の "Tribal Arts and Crafts

in Northern Thailand" (18ページ) が載せてあり、論文としてはむしろこの方がまとまっている。(高木英明)

Theodore Stern: *A Provisional Sketch of Sizang (Siyin) Chin*, Asia Major, n.s. vol. X part 2, 1963. pp. 222-278.

ビルマの西部、チン丘陵地帯で話されているクキ・チン諸語は、従来、比較的未開拓の研究分野であったが、最近では幾つかのすぐれた記述研究が発表されるようになった。

この論文は、著者が1954年に Eugenie J.A. Henderson, G.H. Luce 等と共同で、約6週間に亘って行なったチン丘陵の言語調査に基づいてまとめられた sizang (従来は siyin と書かれた) 方言の記述報告である。(この時の研究成果の一部は既に、G.H. Luce: Chin Hills Linguistic Tour Dec. 1954: J.B.R.S. 1959 で発表された。)

著者は全体を 1. phonology 2. Noun Expression 3. Verb Expression 4. Sentence and Clause の4章に分けて、Sizang 方言の構造をきわめて明確に分析している。

Sizang 方言が、音韻、語彙、文法等の諸点から見て Teizang, Saizang (zang はいずれも<平地>の意)、Tiddim, Ngawn 諸方言ときわめてよく似た構造をもっており、且て Sten Konow, G.A. Grierson 等によって設定された「北部方言」群の存在を再確認した意味でも、この論文の果たした役割は大きい。北部チン方言の研究としては、先に発表された E. J. A. Henderson: Note on Teizang, a Northern Chin Dialect: B.S.O.A.S. 1963 とならぶ貴重な資料だという事ができよう。

この論文の重点は、専ら morphology におかれている。クキ・チン語の affix については、且て S.N. Wolfenden の労作があるが、複雑な affix を詳細に調べてその機能を明らかにしたこの論文は、他の北部諸方言の研究にも大きな参考となる。

一方、記述研究を目的とした論文の性格上、止むを得ないと思うが、他の諸方言との有機的関連性について全く論及されていないのは、はなはだ残念である。例えば、語末子音の交替に関して2個の stem を